HIROKI YOSHIDA
OFFICIAL RELEASE

Race	2016 AUTOBACS SUPER GT Round6
	45th International SUZUKA 1000km
Date	2016.08.27-28
Race Track	SUZUKA CIRCUIT
Team	Gulf Racing with PACIFIC
Car	GULF NAC PORSCHE 911

PACIFIC RACING TEAM

決勝重視のセッティングで予選 21 位から上位を狙う。

2016.08.27 QUALIFYING（公式予選 21 位） WEATHER : DRY

SUPER GT シリーズ第 6 戦が、8 月 27～28 日に鈴鹿サーキットにおいてシリーズ最長となる 1,000km レースとして開催。Gulf Racing with PACIFIC「GULF NAC PORSCHE 911」(阪口良平 / 吉田広樹) は、予選 21 位からスタートしてステディな走行を続け、ピット作業のタイミングで一時は 8 位まで順位を上げる走りを見せた。時おり雨が降る難しいコンディションのなか、規定どおりの 5 回のピット作業をこなし無事 13 位でチェッカー。目標の入賞こそならなかったが、数多くのデータを収集し、スタッフもさまざまな経験を積み、大きな収穫を得るレースとなった。

真夏の 3 連戦の最後となるレースは、夏休み最後の週末に鈴鹿で開催。一周 5.807km と国内最長のコースには、15 台の GT500、29 台の GT300 車両が集結した。この鈴鹿はテクニカルなコーナーを持ちながらもチャレンジングな高速コーナーや長いストレート 2 本を持ち、富士よりもラップスピードが高い高速サーキット。また Gulf Racing with PACIFIC の地元コースということもあり、この伝統ある長距離耐久レースでの入賞を目標としていた。今回ポルシェ 911 GT3R は性能調整 (BoP) により前回より 10kg 重量増となった。しかしハンディキャップウェイトも搭載しておらず、また長いレースだけに完走を果たせば結果はついてくるため、6 時間後のチェッカーまで走りきることが肝心となる。

予選日朝の公式練習では、気温 29℃と例年よりやや低めのなか、阪口と吉田が車両の動きを確認しながら 17 位につけ、まずまずの走り出しとなった。午後の公式予選 Q1 開始時には気温も 33℃、路面温度も 44℃まで上昇。Q1 ではいつものように阪口がコースイン。セッティングは無理をせず、一発のタイムよりも安定走行ができるようなものということもあり、公式練習よりタイムを縮めるものの 21 位で終了となり、これでスターティンググリッドが確定した。

予選日の夜に降り出した雨は朝まで残ったが、決勝前のフリー走行時までにはそれも止み、コースは徐々に乾いていった。このフリー走行ではレインタイヤを履いた阪口が 9 位につけ、ウェット路面では大幅に順位を上げることが期待された。しかしコースコンディションは回復傾向にあり、決勝中も何度か降雨はあったものの、残念ながらレインタイヤを履くことはなかった。

SPONSORS

PARTNERS

HIROKI YOSHIDA
OFFICIAL RELEASE

PACIFIC RACING TEAM

シリーズ最長の 1,000km レースで粘りの 3 連続完走

2016.08.28 RACE（決勝 13 位） **WEATHER : WET/DRY**

12 時半にパレードラップがスタート。当初はウェットパッチの残ったコースコンディションを考慮してレインタイヤでスタートする作戦だったが、許された時間ギリギリにスリックタイヤに交換。レインタイヤを装着してスタートした車両も数台あったが、この判断がまず成功した。阪口はオープニングラップで 4 台をかわして 17 位へジャンプアップ。前後を走る車両とバトルを展開しながら周回を重ねた。25 周を過ぎると最初のルーティーン作業のためにピットインする車両が出始めたが、阪口はピットインを遅らせクラス 8 位となった 29 周目にピットインして吉田に交代した。このピットではタイヤは交換せず、吉田は 20 位でコースに戻ると 37 周目には 16 位へ順位を上げ堅実に周回を重ねていった。

48 周で吉田がピットインして阪口に交代。タイヤ交換を担当する学生もミスなく作業を完了し車両をコースに送り出す。中盤、80 周を過ぎたあたりで一台の車両がクラッシュしてセーフティカーが導入された。しかし運悪く、11 位を走行していた阪口はクラストップとは周回遅れになっており、この時点で勝負権を失うことになってしまった。さらに阪口はそれまでに 35 周を周回しており、次のピットインも近い状態だった。セーフティカーが隊列から離れるとバトル再開。ここで阪口はピットインして再び吉田に交代した。

その後も他の車両にトラブルが出るなか、吉田と阪口はステディに周回を重ね、108 周と 134 周でのピット作業もそつなくこなし、最後は吉田が 158 周のチェッカーを受けて 13 位でゴール。トップ 10 でのゴールこそならなかったが、無事 917.5km を走りきった。また学生を含むピットスタッフもミスなく 5 回のピット作業を終え、仕事を万全に果たした。この結果は成長中の若いチームにとって大きな糧、そして大きな自信となることだろう。シリーズも残り 3 ラウンドとなったが、高い目標に向けてチームは大きく前進した。

■国江仙嗣監督

「チームがひとつになって、ミスなく完璧な仕事をこなしてくれました。入賞こそできませんでしたが 1,000km レースを無事に終えたことが大きな喜びとなりました。もっと上を目指さないといけませんが、今回の結果はとてもうれしいです。スリックタイヤが 3 セットしか使えないこともあって厳しい展開になりましたが、作戦どおりにやりこなせたことが非常に大きいです。応援もたくさんいただきました。ありがとうございました。」

■阪口良平選手

「初めから長い決勝レースを想定して臨みましたが、スタート前にタイヤを交換したのはいい判断でした。3 回のスティントを担当しましたが、クルマのフィーリングは周回をこなすにつれ良くなっていきました。長いレースでしたが達成感があります。ピットワークもほぼノーミスでしたし、チーム全体がかなり成長できたと思います。鈴鹿 1,000km には 02 年から出ていますが、今年もいい経験になりました。チームに感謝です。」

■吉田広樹選手

「僕に交代する際は毎回タイヤ交換をせず、タイヤ交換分のピット停止時間を稼ぐという作戦でしたので、タイムを上げるのが難しい状況もありましたが、ミスなく走れて自分の仕事は無事こなせたと思います。ただこれは正攻法ではなく、ライバルに置いていかれて騙し騙しの走りになってしまったという課題はあります。チーム全員がミスなく粘り強く 1,000km レースをやり遂げたことで、みんな大きな収穫を得ることのできたいいレースでした。」

吉田 広樹

SPONSORS

PARTNERS